

The Catskills と 19 世紀アメリカ人の礼拝

水 木 慶 子*

The Catskills and Nineteenth Century American Worship

Keiko Mizuki

This paper deals with the Catskill Mountain House, the first American mountain hotel, which is called “one of the monuments of nineteenth century American culture.” Tourism started in America in 1820s and 1830s, half a century later than in Europe, especially in England. Soon American Grand Tour was established, including such American topographical features as Niagara Falls, but the most important part of the Grand Tour was the Hudson Valley. The Hudson Valley included the Hudson River and the Catskills, most importantly, the Catskill Mountain House, located on the shoulder of South Mountain. Until the time of the Civil War a lot of people visited this “famous cloud-capped palace” every summer.

What did this phenomenon mean? The author explores various literature of the time and tries to find out its import in religious and aesthetic contexts. She wants to show that the Mountain House was a sacred place to experience God more closely for people of the mid-nineteenth century.

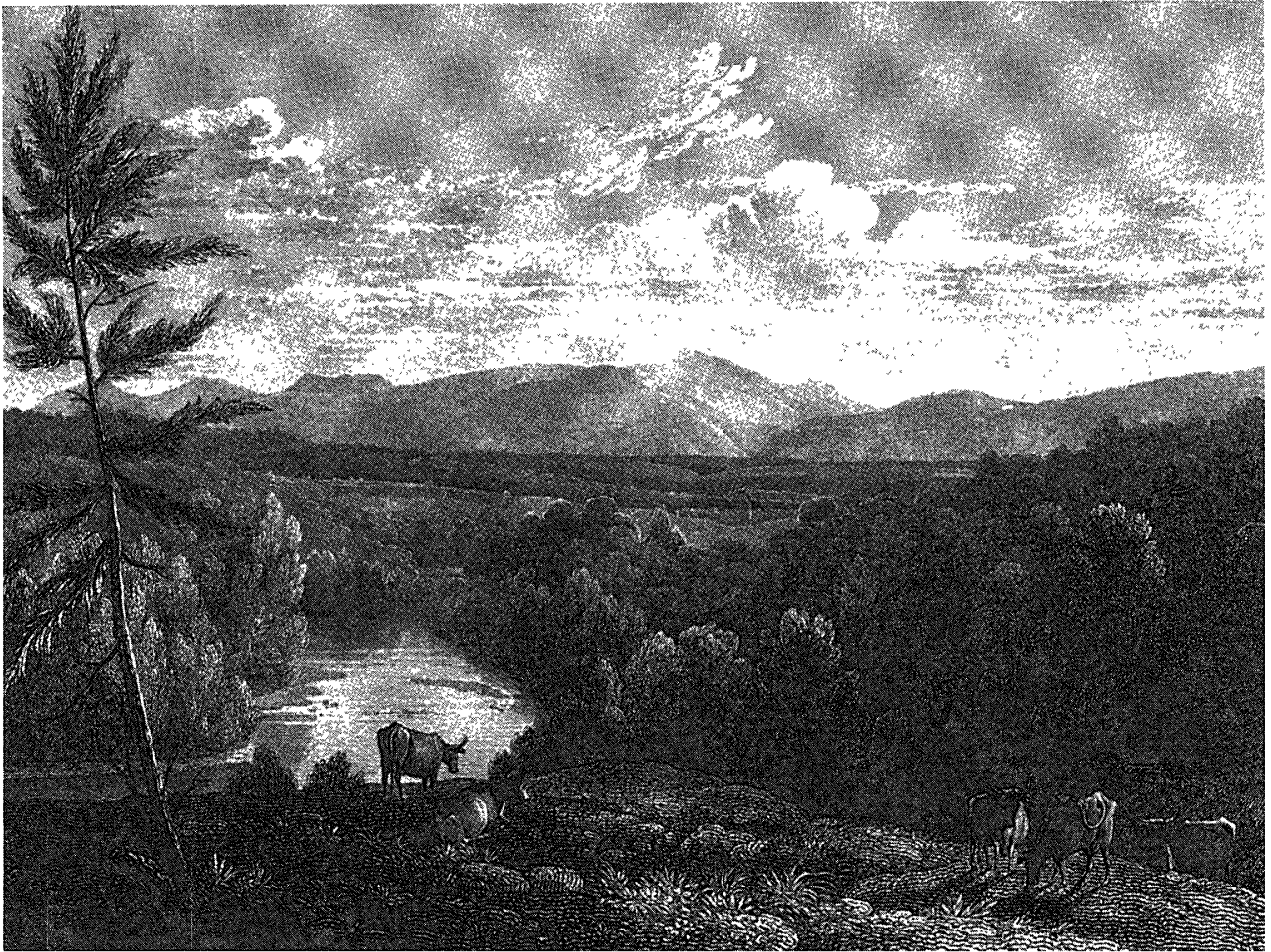
—はじめに—

New York から Hudson 川を北上していくと、Hyde Park のあたりから左手に the Catskills (キャッツキル山) の山並が見えてくる。その中にそびえる South Mountain の肩、Hudson 川の川床から約 2,250 フィートのところに、かつて白く輝く点が認められた。19 世紀の有名なイギリスの旅行家 Harriet Martineau は対岸の Tivoli よりこの点を認めて “What is that white speck?” と訊ねたと記している (Martineau, 82)。この点こそ、今ではもう取り壊されてしまったが、19 世紀には “the noblest wonder of the Hudson Valley” (Van Zandt, 3)¹⁾ とも “that famous cloud-capped palace” (Richards) と呼ばれた the

Catskill Mountain House であった。

the Catskill Mountain House とはアメリカで最初の mountain hotel のことであり、“one of the monuments of nineteenth century American culture” (Van Zandt, 3) であるといわれている。the Mountain House は 1824 年に South Mountain の肩にある半径 4 マイルほどの台地のような地域 Pine Orchard の断崖の際に立てられた。それまではこの地域には一つの宿泊施設もなかったが、このホテルがオープンして以来多くの人を呼び集め、1840 年には、夏の間は “half the population of the United States—more or less” (Willis, 77) がここに集まると冗談で言われるようになった。なにゆえ、それほど多くの人々が長い山道をもいとわずにこのホテルを訪れたのであろうか。本稿ではこの現象を分析することによって、19 世紀初頭から南北戦争にかけてのアメリカ文化の一端を明らかにしていきたいと考える。

* 東京工芸大学工学部基礎・教養助教授
2000 年 9 月 19 日 受理



図版 1

Asher B. Durand, Catskill Mountains (1830) 版画

the Mountain House は右の山の肩に白い点として描かれている。

写真提供：Print Collection. Miriam and Ira Wallach Division of Arts, Prints, and Photographs. The New York Public Library Astor, Lenox and Tilden Foundations

— 1 —

John F. Sears は著書 *Sacred Places* において、「ヨーロッパ、特にイギリスでは 1775 年頃までに tourism が確立し、裕福なイギリス人が picturesque and sublime scenery を求めて旅行するマニアにとりつかれたが」「アメリカでは 1820～30 年代までは tourism が発生する条件が十分に整わなかった」(3) と述べている。tourism は、旅行できる余裕のある人々、交通手段、行き先での安全性と快適さ、宣伝広告の媒体などを必要とするが、アメリカでは 1820～30 年代に至ってやっと道路や馬車、汽船、運河、鉄道などの交通手段が確保されるようになり、また、都市が発展して tour-

ists となるべき中産階級が生みだされたのである。やがて、アメリカ旅行の標準コースともいえるべき American Grand Tour (the Hudson River—the Catskills—Lake George—the Erie Canal—Niagara Falls—the White Mountains—the Connecticut Valley) が確立するようになった。

アメリカで tourism が発展をみたのには、人々が楽しみを必要としたということの他に、もっと深い文化的欲求が関係していたと思われる。独立から半世紀を過ぎ、国家としての繁栄期に入ったアメリカは、ヨーロッパとは異なるアメリカ独自の文化的アイデンティティを強く求めていた。様々な異なった文化的背景を持つ人々が、アメリカ人としての共通のアイデンティティを、移り住んできたアメリカの土地そのものに求めたとして

も無理からぬところであろう。こうして、「tourism はアメリカを一つの場所として定義し(ナイアガラなどの)アメリカの特徴的な風景に誇りを持つ手段を提供した」(Sears, 5)のである。

さて、Niagara Falls が American Grand Tour の重要な部分であったろうことは想像に難くないが、実は the Grand Tour のもっとも重要とされた部分は、the Hudson Valley (the Hudson River と the Catskills を含む) だったのである (Sears, 56)。そして、the Hudson Valley の終点に、このコースのフィナーレを飾るがごとくに the Catskill Mountain House があった。

Sears によれば、the Hudson Valley と the Connecticut Valley はアメリカでもっとも早く旅行者が訪れるようになった地域である。どちらも、New York などの都会から比較的楽に行けたこと、山、川、平原などの変化に富んだ景色に恵まれていたこと、そしてどちらの土地も肥沃で早くから人が定住して開墾が進み、立派な家や豊かな農場や村が出来ていて、アメリカの中でもっとも文化的な(civilized)景色であると考えられていたことがその理由としてあげられよう。Niagara Falls はヨーロッパには見られない自然の壮大さを示すものであったが、この二つの川谷はヨーロッパに引けを取らないアメリカの文化程度を表す「文化的で洗練された風景」(“domesticated, even refined landscapes”, 49)を提供したのである。

ところで、19 世紀にヨーロッパとアメリカで大流行したものに cycroramas, dioramas, panoramas がある。これらは、ある特定の場所を描いた一連の絵を円形の部屋の壁にぐるりと飾って置いて見物人が歩き回って見るか、あるいは、絵の方が、静止している人の前を動いていく仕掛けのことで、まるで見知らぬ場所を旅行しているようなイリュージョンがあり人気を博したのであるが、現実の川谷を汽船で旅行するのは、周りの景色が実際に移り変わっていくので、まさに本物のパノラマ的経験を味わえたのである。特に、the Hudson River は汽船での運航も楽であったし、また、移りゆく周りの景色が、険しい山あり大きな農園あり町ありで実に変化に富んでいた。1832

年にここを旅行したイギリス人の Fanny Kemble は次のように述べている：“At every moment the scene varied; at every moment new beauty and grandeur was revealed to us.” (Van Zandt, *Chronicles of the Hudson*, 197)。

こうして、the Hudson River を汽船で上りながら風景のパノラマを堪能した旅行者は Catskill 村で汽船から降ろされる。そこから、多くの人が、馬車または徒歩で the Mountain House を目指して the Catskills を登っていったのである。

— 2 —

当時のアメリカ人はいったい the Catskills のどこに心惹かれたのであろうか。この問題を考える前に、ヨーロッパ、そしてアメリカにおいての自然に対する考え方を少しさかのぼって見てみる必要がある。

中世的宇宙観のもとでは the city が神のものであり the wilderness：人間の手の加えられていない自然は悪魔のものであると考えられていたため、中世ヨーロッパにおいては the wilderness に対する嫌悪が支配的であった。だが、ルネッサンス後の科学の発達により変化が訪れる。17 世紀初頭に天動説がくつがえされ中世的宇宙観がくずれて、宇宙が無限であることが明らかになったのである。宇宙が無限であるという観念は人々の心にカオスの恐怖をよびおこし、神の再定義をも含めた新しい宇宙観が是非とも必要になった。この危機は Henry More らが、カオスを暗示するように思えた宇宙の無限性こそ、無限で慈悲深い神のもっとも明らかな顕示であるとするに至って克服され、やがて、無限性：infinity を暗示するような地上のすべての壮大なもの：山、大洋、砂漠、森などが神と結びつけて考えられるようになった。Nicolson は名著 *Mountain Gloom and Mountain Glory* の中で次のように述べている。

Awe, compounded of mingled terror and exultation, once reserved for God, passed over in the 17th century first to an expand-

ed cosmos, then from the macrocosm to *the greatest objects in the geocosm—mountains, ocean, desert*. “Mountains, who to your Maker’s view, seem less than mole-hills do to you” are only relatively vast, yet except for the heavens they are the grandest and most majestic objects known to man. Scientifically minded Platonists, reading their ideas of infinity into a God of Plenitude, then reading them out again, *transferred from God to Space to Nature conceptions of majesty, grandeur, vastness* in which both admiration and awe were combined. The 17th century discovered “*The Aesthetics of the Infinite*.”²⁾

(Nicolson, 143)

17 世紀に発生した “The Aesthetics of the Infinite” は、18 世紀に入り Edmund Burke らの手を経て、18 世紀中頃には、自然の中の壮大なもの：the natural sublime を神の glorious presence の啓示であるとする sublime 美学として確立し、ロマン主義の時代に至って神格を得るようになったのである。

では、アメリカでの状況はどうだったのでしょうか。17 世紀にアメリカに移住したピューリタンはその地に手つかずの広大な wilderness を見いだした。彼らにとっては、中世ヨーロッパ人と同じく、the city が神のものであり the wilderness は悪魔のものであった。当時の牧師兼医師 Michael Wigglesworth (1631—1705) は、植民地の外に広がる見知らぬ世界を “*A waste and howling wilderness, /Where none inhabited/But hellish fiends*” (qtd. in Moore, 7)³⁾ と呼んでいるし、植民地時代を舞台にしたと思われる Nathaniel Hawthorne の “Young Goodman Brown” でも、深い森は悪魔の支配する世界とされている。また、今日、大勢の観光客が訪れる Niagara Falls も 17 世紀には恐れをもって眺められた。1679 年にここを訪れた Father Hennepin なる人物は “the Waters, which fall from this

vast height, do foam and boyl after the *most hideous manner imaginable*, making an outrageous Noise, *more terrible* than that of Thunder.” (qtd. in Moore, 8)⁴⁾ と述べている。果てしない森、高い山、そして深い溪谷に刻まれたアメリカの sublime な風景は、楽園を追放されたアダムが踏み込んだ、神の恩寵からはずれた世界と考えられたのである。

The psychological sense of *exile* which would inevitably attend their venture into *an unknown wilderness* was compounded by the conviction that the sublime American topography was mute but terrific testimony of *a world fallen from grace*. The American landscape, scarred with mountain barriers and pocked with gorges and canyons, was the type of *the post-Adamic world*; it seemed *the product of some unimaginable cataclysm*.

(Moore, 9)

しかし、1776 年の独立による自信とヨーロッパから伝えられた sublime 美学の影響であろうか、時代が下り 18 世紀後半が進むとアメリカ人の自国の自然に対する態度に変化が見え始める。たとえば、Thomas Jefferson は *Notes on Virginia* (1784) において Virginia の natural sublime である Virginia’s Natural Bridge について次のように述べている。

If the view from the top be painful and intolerable, that from below is *delightful in an equal extreme*. It is impossible for the emotions arising from the sublime to be felt beyond what they are here; *so beautiful an arch, so elevated, so light and springing as it were up to heaven*; the rapture of the spectator is really indescribable.

(Jefferson, 581)

つまり、Virginia's Natural Bridge を上から見るのは「耐え難い」が、下から見ると「耐え難い」と同程度に、いや、多分それ以上に「歓喜」を感じるというのである。世紀がかわって1803年、保養のため、Philadelphia から wilderness tour に出かけた Thaddeau Mason Harris 牧師は、かつて悪魔の支配する世界とされた“vast forests”に深い感銘を受け、「自然と二人だけになって神と語らう」と、後の Emerson や Thoreau をも先取りしたような言葉を記している：“there is something which impresses the mind with awe in the shade and silence of these vast forests. In deep solitude, *alone with nature, we converse with God.*” (qtd. in Moore, 11)⁵⁾

同じ1803年にアメリカは Louisiana をフランスから、1819年には Florida をスペインから購入、1814年には第二次対英戦争(1812～1814)に勝利し、国家としての足場を固めた。そして、独立50周年にあたる1826年頃までにはフロンティアはすでにミシシッピ川まで達し、アメリカの人口がまさに西部に流れ込もうとしていた。アメリカはかつてないような成長と繁栄の時代を迎えようとしていたのである。こうした中であって、アメリカ人は(前述のように)自らの存在と自尊の基盤をアメリカの土地(自然)に求めたのである。ヨーロッパには立派な歴史と文化があるが、アメリカにはヨーロッパにはないような自然がある、神の glorious presence の啓示である sublime な自然があるではないか。1830年代になると、アメリカの文筆家や画家はこぞってアメリカの wilderness を、そしてそこに見られる sublime な自然を讃え始めた。

たとえば、アメリカ最初の風景画派 the Hudson River School の創始者となった画家 Thomas Cole は、記念すべきエッセー“Essay on American Scenery” (1835)をアメリカの風景を讃えることによって始めている。

It is a subject that to every American ought to be of surpassing interest; for, whether he beholds the Hudson mingling waters with

the Atlantic—explores the central wilds of this vast continent, or stands on the margin of the distant Oregon, he is still in the midst of American scenery—it is his own land; its beauty, *its magnificence, its sublimity*—all are his; and how undeserving of such a birthright, if he can turn towards it an unobserving eye, an unaffected heart!

(Cole in McCoubrey, 98)

つづいて Cole は、「アメリカの風景の最大の特徴は wildness である」(“the most distinctive, and perhaps the most impressive, characteristic of American scenery is its wildness”: 102) としたうえで、「アメリカの風景の大きな欠点と考えられてきたもの—歴史の浅さから来る、風景にまつわる連想の乏しさ」(“what has been considered a grand defect in American scenery—the want of associations, such as arise amid the scenes of the old world”, 108)についてふれ、次のようにアメリカの風景を弁護している。

He who stands on Mont Albano and looks down on ancient Rome, has his mind peopled with the gigantic associations of the storied past; but he who stands on the mounds of the West, the most venerable remains of American antiquity, may experience the emotion of the sublime, but *it is the sublimity of a shoreless ocean un-islanded by the recorded deeds of man.* (108)

要するに、ヨーロッパには過去の歴史から来る豊かな連想があるかもしれないが、アメリカでは人間の過去の行為に関係のない自然の sublimity そのものを感じることができるというのである。

Cole の親友であった詩人 William Cullen Bryant も同じような論法を使っている。彼は“far-spread wildness”を特徴とするアメリカの風景は創造主の手から放たれたままの姿に近く、

その風景には、“the idea of unity and immensity”を暗示し、心を人間的な連想から解き放って神へと高めてくれる何物かがあると述べている。

Foreigners who have visited our country, particularly the mountainous parts, have spoken of a far-spread wildness, a look as if the new world was fresher from the hand of him who made it, the rocks and the very hillocks wearing the shape in which he fashioned them, the waters flowing where he marked their channels, the forests, enriched with a new creations of trees, standing where he planted them; in short, of something which, more than any scenery to which they had been accustomed, suggested the idea of unity and immensity, and abstracting the mind from the associations of human agency, carried it up to the idea of a mightier power, and to the great mystery of the origin of things.

(Bryant in Durand and Wade, 5-6)

もし、wild なままの自然が divine order の啓示だとしたら、いったいアメリカ以外のどこでそれをより明確に見ることができるだろうか。アメリカの風景に歴史的文化的連想が乏しいからこそ、心は“the much higher associations of a divine rather than human agency”(Van Zandt, 212)に解き放たれるのではないか。これは、従来、アメリカ人が引け目に感じてきた歴史や文化の浅さという弱点を逆手にとって、邪魔するもののないアメリカの wilderness でこそ神を見ることができるのだという逆転の発想であった。Emerson も、divinity は the cultivated field や the face of the city's blank wall などではなく、the wilderness にこそ見いだすことができると述べている。1830 年代から南北戦争に至るまでのアメリカの文化人は、介在するものなしに自然と直接に対峙することにより、神にふれようとしたのである。

さらに、James Brooks は“Our Own Country”

(1835)という熱をおびたエッセーの中で、アメリカ全体を、神の新しい契約が果たされる大きな TEMPLE と考えている。

God has promised us a renowned existence, if we will but deserve it. *He speaks this promise in the sublimity of Nature.* It resounds all along the crags of the Alleghanies. It is uttered in the thunder of Niagara. It is heard in the roar of two oceans, from the great Pacific to the rocky ramparts of the Bay of Fundy. *His finger has written it* in the broad expanse of our Inland Seas, and trace it out by the mighty Father of Waters! The august TEMPLE in which we dwell was built for lofty purposes. Oh! that we may consecrate it to LIBERTY AND CONCORD, and be found fit worshippers within its holy wall!

(Brooks, 48)

ここではもはやアメリカ人は樂園を追放された者などではない。Protestant の真の継承者、the Pilgrim Fathers の子孫として、特別な使命を果たすべく神に選ばれた民である。そして、the American wilderness という Nature's unwall'd Temple の中で、新しいエデンの約束が果たされるのである。

— 3 —

以上のように、1830 年代から南北戦争に至るまでの時期に、アメリカの文化人の間ではアメリカの wild な自然の持つ sublimity がもてはやされたのであったが、the Catskills が当時の人々の心をとらえたのも、その “specutacular wildness” (Van Zandt, 156)ゆえであった。the Catskills を広く世に知らしめたのは、主として四人の人物の力によるところが大きい：すなわち、Irving, Cooper, そして前述の Cole と Bryant である。

Washington Irving は 1800 年に the Hudson

River を船で上り, the Catskills に強く心を引かれたという. “The interior of these mountains is in the highest degree wild and romantic;” (qtd. in Van Zandt, 158)⁶⁾ と, 後に彼は述べている. そして, Irving は *The Sketch Book* (1819-1820) の中の一編 “Rip Van Winkle” の舞台として the Catskills を選んだのである. 愛すべき恐妻家の Rip が the Catskills の山中に逃げ込み, そこで一夜を明かしたと思ったら, 実は 20 年も経っていたという, 文明から the wilderness への逃避の物語はアメリカ人の想像力に訴えかけ, the Catskills への興味を喚起した.

James Fenimore Cooper は *The Leather-Stocking Tales* の著者であるが, その第一作 *The Pioneers* (1823) の中には, 主人公が Pine Orchard からのすばらしい眺めについて感動をこめて述べる有名なパッセージ(後述)がある. Cooper は, “the vastness of the virgin forest” に心を奪われて, 北アメリカの森林を初めて文学に取り上げた作家だが, 創作にあたっては少年時代の the Catskills の記憶を駆使したといわれている. Cooper は多くの作品を通じて the Catskills を “the prototype of the whole American wilderness” (Van Zandt, 160) にしたといえる.

Thomas Cole は 1825 年に初めて the Catskills を訪れ, “I was overwhelmed with an emotion of the sublime” (qtd. in Van Zandt, 164)⁷⁾ とその感動を述べている. the Catskills が彼のロマンティックな感受性を解放し, 創作のインスピレーションを与えてくれたことは間違いなく, この年以降, the Catskills を題材にした絵を矢継ぎ早に発表して話題となり, 展覧会の彼の絵の周りにはいつも人垣が出来た (Van Zandt, 165) という.

Bryant は友人 Cole により, the Catskills の “the sublime mountain tops and the broad forests and the rushing waterfalls” (Bryant in Durand and Wade, 41) に導かれた. 二人はよく連れだって the Catskills 山中を散策し, その姿は, アメリカロマン主義における絵画と文学の結合のシンボルとして, Asher B. Durand の有名な絵 *Kindred Spirits* (1849: the New York

Public Library 所蔵) に描かれ, 今日に伝えられている. やがて, 二人の周りには多くの画家や文人が集まるようになり, 特に Cole の存在は大きく, the Catskills は the Hudson River School の本拠地となったのである.

こうして, the Hudson River School の画家たちの手になる絵画や版画によって the Catskills の風景の大衆化が行われ, また, 1830 年代, 40 年代を通して, 新聞, 雑誌, 文芸年刊に多数の the Catskills 訪問の記事が定期的に掲載されたことにより, the Catskills は広く人々の知るところとなった. しかも, New York という急成長を遂げつつある都市の北 110 マイルにあって, New York の “suburb” (Willis, 106) というにはちょっと距離があるにしても, 1854 年にはほとんど毎時 New York から汽船なり汽車なりが出ていた. the Catskills はいわば New York から手の届くところにあった the American wilderness であり, 多くの人が the sublime of nature を求めて足を運んだのである.

— 4 —

さて, Catskill 村に降り立った旅行者は, たいいていの場合, stagecoach(乗合馬車)に乗って 12 マイルの道を the Mountain House 目指して登っていった. Catskill 村は海拔 0 に近いが, 馬車はまず山のふもとまでの 8 マイルの旅で 700 フィート登り, そこからの 4 マイルの本格的な登りで 1,550 フィート登った (Van Zandt, 80). 料金は 1826 年から 1835 年までは 1 ドルで, 4 時間ちょっとの行程のはずであったが, 実際にはもう少し長く (5 時間以上も: Martineau, 84) かかったようである. 旅行者の中には女性も少なくなかったが, 当時の人は現代人とは比較にならないほど足が丈夫だったらしく, 馬車で山道を登るのを嫌って, 本格的な登りが始まるところで降りて, 巡礼のように杖を頼りに歩いて登る人も多かったのである. また, 馬車にのこったとしても, 最後の 1 マイルの急峻な登りでは, 馬車の荷を軽くするために客は降りて自力で登るのが普通であった (Van Zandt,

77).

Sears は、19 世紀に Niagara などの tourist attractions を訪れた人は、自らのことを“pilgrim”と呼ぶことが多かったと述べている (Sears, 5). the Catskill Mountain House の場合も例外ではなかった. the Mountain House 建設の一年前(1823 年)に、まだ馬車も通らない山道を自力で登っていった Robert Sands は“only our pilgrim staves and scrips” (Sands, 203)を持っていったと記している. また、彼は、Pine Orchard への旅を「天国への巡礼の旅」になぞらえている: “And, afterwards, I could not help assimilating

our journey to that of Life, when the unseen and unknown heaven has been steadfastly kept in mind as the bourne of its pilgrimage;” (204). アメリカのロマン主義運動の推進役をつとめた雑誌 the Knickerbocker Magazine の編集者の一人であった Willis Gaylord Clark は、馬車で山を登り始めたが、もっと早く行きたくてたまらなくなり、途中で飛び降りて杖を頼りに自力で目的地を目指したと“Ollapodiana” (1837)に書きしるしている. 彼もまた、この旅を pilgrimage と呼んでいるが、それに加えて、ユーモラスな調子ながら、the Mountain House を the ‘earth’s one sanctu-



図版 2

John Rubens Smith, Catskill Mountain House (1830) 版画

山上の Mountain House は日の光をあびて白く輝き、the heavenly Jerusalem を思わせる。

写真提供: Print Collection. Miriam and Ira Wallach Division of Arts, Prints, and Photographs. The New York Public Library. Astor, Lenox and Tilden Foundations.

ary' (the heavenly Jerusalem)に, the Mountain House の宿帳を the elect (神に選ばれて永遠の救いを得た者)の名前が記されている the heavenly 'book'にたとえている。

I continued to ascend, slowly, but with patient steps, and with a flow of spirit which I cannot describe....Hill after hill, mere ridges of the mountain, was attained—summit after summit surmounted—and yet it seemed to me that the house was as far off as ever. Finally it appeared, and a-nigh; to me *the 'earth's one sanctuary.'* I reached it: my name was on *the book*; the queries of the publican, as to 'how many coach-loads were behind,' (symptoms of a yearning for the almighty dollar, even in this holy of nature's holies) were answered, and I stood on the Platform.

(Clark, 171-172)

Patrick McGreevy は“Niagara as Jerusalem”において、中世の巡礼は Canterbury などの目的地を “a sacred place where they would experience God more closely”と考えていたと述べている。そこへの旅は “a metaphor for their passage through life to heaven”であり、目的地は “a porthole into eternity”であった。そして、McGreevy は Niagara を中世の shrine と比較しているのである (qtd. in Sears, 6)⁸⁾。Sears は、Niagara などの 19 世紀の tourist attractions は、Mircea Eliade の言う、古代社会の sacred space, axis mundi (the center or navel of the world) の性格を帯びていたと言っている。寺であれ、町であれ、山であれ、古代社会の sacred space とされた場所は、「聖なるものがこの世に流入する」所と考えられ、“copies of transcendent models”であったから、たとえば Jerusalem は the Heavenly Jerusalem の複写であると考えられたのである (Sears, 6)⁹⁾。

上の Sands や Clark の記述から, the Moun-

tain House への旅行者にも、中世の巡礼と似たような考え方が残っていたことが分かる。the Mountain House は、「神をもっと近しく体験する聖なる場所」という宗教的意味合いを持っていたのだと思われるのである。

the Mountain House は Pine Orchard の東向きの断崖の上に建てられていた。そして、そこからは眼下に the Hudson Valley を見晴らすことができたのである。the Mountain House は断崖に平行に(東向きに)建てられていたので、旅行者は自室から、または the piazza から、あるいは通称 the Platform と呼ばれるホテルの前の台地に出てこの景色を見ることが出来た。ここからの景色はまさに the Catskills の白眉であって、これについて書かれた記事の数は実に膨大であり、ほとんど「19 世紀のオブセセッション」(Van Zandt, 200)といえるほどであった。

その中で、もっとも初期に書かれたものの一つがもっとも有名なもので、Cooper の *The Pioneers* (1823)の中に出てくる記述である。「そこからはいったい何が見えるの？」とたずねられ、主人公 Natty は“all creation”と答える。

“What see you when you get there?” asked Edwards.

“*Creation,*” said Natty, dropping the end of his rod into the water, and sweeping one hand around him in a circle: “*all creation, lad....*The river is in sight for seventy miles, looking like a curled shaving under my feet, though it was eight long miles to its banks. I saw the hills in the Hampshire grants, the Highlands of the river, and *all that God had done, or man could do*, far as eye could reach—you know that the Indians named me for my sight, lad; and from the flat on the top of that mountain, I have often found the place where Albany stands.”

(Cooper, *The Pioneers*, 299-300)

これが、19 世紀を通して、そして 20 世紀になっても引用されつづけている有名なパッセージである。そこからは、神の全創造物と人間の成し得る業すべてが見えるというのである。

次に、先ほど引用した Willis Gaylord Clark の文章の続きを見てみよう。the Platform に到着した彼は、巡礼の杖にもたれながら、目の前に広がる“that omnipotent picture”を眺める。

Good reader! expect me not to describe *the indescribable*. I feel now, while memory is busy in my brain, calling up that vision to my mind, much as I did when I leaned upon my staff before *that omnipotent picture*, and looked abroad upon *its God-written magnitude*. It was a vast and changeful, a majestic, an interminable landscape; a fairy, grand, and delicately-colored scene, with rivers for its lines of reflections; with highlands and the vales of States for its shadowings, and far-off mountains for its frame....All colors of the rainbow; all softness of harvest-field, and forest, and distant cities, and the towns that simply dotted the Hudson; and far beyond where that noble river, diminished to a brooklet, rolled its waters, there opened mountain after mountain, vale after vale, State after State, heaved against the horizon, to the north-east and south, in impressive and sublime confusion; while still beyond, in undulating ridges, filled with all hues of light and shade, coquetting with the cloud, rolled the rock-ribbed and ancient frame of this dim *diorama*!

(Clark, 172)

注目すべきは彼が目の前の風景を“that omnipotent picture”, “its God-written magnitude”と呼んでいることである。Clark にとって、目の前の壮大な風景は、全能にして慈悲深い神の力と威

厳、そして神の作り給うた世界の秩序を示すものに他ならなかった。

また、Clark よりも前に (the Mountain House 建設の一年前: 1823 年に), the Platform まで登った Robert Sands は、崖っぶちから見た光景の vastness に圧倒され、雷にでも打たれたようにその場に釘付けとなり、しばし、感覚も麻痺して何も理解できなかったと記している。

When, therefore, after climbing a moderate ascent on the left, I stood upon the naked flat rock, two or three acres in extent,... and when I advanced to its brink, overlooking five or six States, *the vastness of the scene that broke upon me all at once was overwhelming, and, at first, not understood.*

I beheld—‘Creation!’ as Natty Bumpo said,...On the verge of this stupendous precipice, whose sheer descent is in some places nearly a thousand feet, in an attenuated atmosphere, above the common clouds and vapours, with all heaven overhead, and half the earth, as it would seem at first, spread beneath the feet, there was nothing artificial, nothing that man had done, to relieve or break *the suspension of the faculties which occurred instantaneously when the prospect burst upon the eye.*

(Sands, 205)

そして、この息詰まるような瞬間に彼は神の存在を実感するのである。

The presence of God was realized, in the breathless pause of the moment. Nor did the sensation accompanying this consciousness soon pass away. On changing my position, to which I had been fixed and rooted for the time, on moving to other points of observation, and on ascending to higher acclivities, still the same unlimited

extension lay before the sight, and the image of eternity dwelt upon the mind.

(Sands, 206)

一方, Clark は日没の直前, 眼下の谷を満たす雲海の中に “a giant form” を認め, それに触れようと手を伸ばしたことを記している。

Just before the sun dropped behind the west, his slant beams poured over the South Mountains and fell upon a wide sea of feathery clouds, which were sweeping midway along its form, obscuring the vale below. I sought an eminence in the neighborhood, and with the sun at my back, saw a giant form depicted in a misty halo on the clouds below. He was identified, *insubstantial but extensive Shape! I stretched forth my hand*, and the giant spectre waved his shadowy arm over the whole county of Dutchess, through the misty atmosphere; while just at his *supernatural coattail*, a shower of light played upon the highlands, verging toward West Point, on the river, which are to the eye, from the Mountain House, level slips of shore, that seem scarce so gross as knolls of the smallest size.

In discoursing of the territorial wonderments in question, which have been moulded by *the hand of the ALMIGHTY*, I cannot suppose that you who read my reveries will look with a compact, imaginative eye upon that which has forced radius upon my own extended vision. I ask you, howbeit, to take my arm, and step forth with me from the piazza of the Mountain House.

(Clark, 173)

この “giant form” は, おそらくは Clark 自身の影なのだろうが, 彼は「全能の神の手になる」超

自然的な “Shape” として, それに接触を試みているとも受け取れるのである。

ところで, the Mountain House の超目玉というべきものは日の出であった。 “The staple, *par excellence*, of the Mountain House is the ‘sunrising.’” と Richards は言っている (147)。この時代に the Mountain House を訪れた人にとって, 一日の最初の光のもとで “the famous sight of all creation” を見ることほど inspiring なことはなかった。 “the rite of morning sunrise”こそ, the Mountain House に来たからには絶対にしなくてはならないこと: a “must”であったのである。晴れた日の朝ならいつでも, 20 人かそれ以上の熱心な宿泊客が寒い吹きさらしの the Platform に出て, 日の出を待ちかまえていた。もう少し楽をしたい人は(もし, 東向きの部屋がとれたならの話だが)自分の部屋の窓から日の出を待った。ホテルには少なくとも 30 の真東向きの部屋があつて, ベッドの中から日の出を見ることも出来たのである (Van Zandt, 63)。Cole とともに the Hudson River School を代表する画家, Frederic Edwin Church の手になる絵画 *Morning, Looking East over the Hudson Valley in the Catskill Mountains* (1848; Albany Institute of History and Art 所蔵) には, ただ一人の人物が巡礼の杖代わりの立木につかまって, the Platform 付近から the Hudson Valley の日の出を見る姿が描かれている。

the Mountain House からの日の出の情景を描いた記事の数もまた膨大である。多くの人が, the Hudson Valley を満たす朝霧を ocean にたとえた。Henry Edwin Dwight の記事 (1820) を見てみよう。

In the autumn, a dense fog commonly arises during the night, from the streams within the view, covering with its misty waves the whole area, excepting the tops of these lofty mountains.... The fog rises about 1500 feet in height, and is gilded by the beams of the morning sun as it appears

above the horizon. For an hour after sunrise, the mist is quiescent, exhibiting *an almost shoreless ocean*, with the tops of these peaks rising above it, like distant islands in a calm at sea. After the sun has risen a few degrees above the horizon, the fog begins to be agitated, and to move in vast undulations towards the heavens, shooting its needles into the atmosphere, or rolling its lengthening billows into a thousand figures, presenting a glowing picture of *the general deluge*. It remains agitated about an hour, when, unfolding its misty mantle, the earth below appears here and there illumined by the rays of the sun. When the fog is dispelled by its beams the landscape unfolds all its beauties, *as if it had just sprung into existence at the command of the Creator*.

(qtd. in Myers, 62)¹⁰⁾

ここで, Dwight は朝霧を ocean にたとえてから the general deluge(ノアの大洪水)にたとえ, さらに, その朝霧が太陽の光によって晴れて美しい風景が現れていくようすを天地創造にたとえている。

Tivoli より the Mountain House の白い点を認めて “What is that white speck?”と訊ねた Harriet Martineau は, the Mountain House に二泊して二度日の出を見た。「私は, the Prairies よりも the Mississippi よりも Niagara よりも, ここから見たものに感動した」(82)と言う彼女は, 二日目の日の出について, あまりにも有名な Genesis の冒頭からの引用をまじえて次のように語っている。

Of this last I shall give no description; for I would not weary others with what is most sacred to me. Suffice it that it gave me a vivid idea of *the process of creation*, from the moment when all was without form and

void to that when light was commanded, and there was light.

(Martineau, 89-90)

つまり, Martineau は the Mountain House から見た夜明けに, 創造主が虚無から天地を創造するプロセスを見たと感じたのであった。

しかし, やはり圧巻は Sands の記述であろう。まだ, the Mountain House の出来る以前で the Platform の近くでビバークした Sands は, 翌朝, 眼下を覆い尽くすような霧を見る。そして, その中に何か sublime なもの, “a more immediate though cloudy type of that which is without beginning or end, or any confines”の存在を感じるのである。

And when we arose the next morning, ... the mist that covered the level scene below, just before the dawn, unbounded by any outline, but mingling with the all-casing air that enwraps the planet we live upon, presented to the feelings *a more immediate though cloudy type of that which is without beginning or end, or any confines*, than the ocean itself has ever suggested to me.

(Sands, 206)

彼は, この時ほど, 少々息苦しいような “mighty solitude” に圧倒されたことはなかったと言う。そして, 静寂の中に “a deep voice” を聞き, “a vast phantom” を見る。神の声を聞き, 神の影を見るのである。the wilderness の中での神との出会いの瞬間である。

I have been on much more elevated spots, and have powerfully felt the natural influences of the locality, and the picture before me. But *the sense of mighty solitude, of somewhat oppressive and always sublimating abstraction* from the peddling concerns of mankind, never overcame me

more forcibly than on this occasion. I heard a deep voice, though all was silent, and saw a vast phantom stretching and spreading away forever; and the shadow which this pageant cast over the brain, was constantly that of 'Eternity, Eternity and Power.'

(206)

その後、この近くにある滝まで行ってみた Sands は、深い宗教心にあふれた言葉でこの時の訪問の記述を締めくくっている。Sands は、今、神の glorious presence の啓示としての自然の「大聖堂」の中にいるのだ。wilderness のささやきは「敬虔な連禱と感謝の祈り」に聞こえる。

...here, there and everywhere, we saw nothing which interfered with the religion of the place. Nature remained, stalled and throned in her own holy solitudes. We trod, involuntarily, with cautious steps: and spoke in regulated tones, as if feeling that we were in her Cathedral; that the voices of her waters and the whisperings of her wilderness were devotional litanies and thanksgivings.

(207-208)

19 世紀前半のアメリカ人は、自らの存在と自尊の基盤をアメリカの wilderness に求めた。それは、wild nature が持つ sublimity が神の啓示であるという考えがあったからである。長い山道を登って the Platform から壮大な the Hudson Valley の景観を眺めるということは、全能にして慈悲深い神の力と威厳に浸るという一種の宗教的礼拝であったと思われる。また、彼らは、the Platform からの日の出に、天地創造の荘厳な瞬間をかいま見たように感じたのであろう。そして、邪魔するもののないアメリカの wilderness の中で、直接、神の声を聞き、神の姿を見ようと試みたものと思われる。the Catskill Mountain House はまさしく、中世の Canterbury と同じく「もっと近く神を体験する聖なる場所」であったのである。

最後に、19 世紀半ばまでの the Mountain House の Sabbath がどんなものであったのか見ておきたい。Reverend Theodore L. Cuyler の記録によれば、ある日曜日の朝 5 時までには、24,5 人の宿泊客が外套やショールにくるまって“the day's worship”を始めるために the Platform に集合し、日の出を見た。朝食後、ホテルの drawing-room に pulpit がしつらえられ、第一回目の service が始まる。service は午後、夕方と計三回行われたが、三度目まで満員であった！

Even a third service in the evening was crowded to the door! Again our good dominie from the “land o’brown heath” addressed us, his subject being the “Sepulchre in the Garden;”—again our eyes were lifted toward the everlasting hills whence cometh our help—again our voices rang out upon the still mountain air as we joined in singing “Comfort ye, comfort ye, my people.” When the company separated, unwearied, to their rooms, the general utterance was: “What a blessed Sabbath we have had! A more delightful we never passed than this Sabbath on the Catskills!”

(qtd. in Van Zandt, 67-68)¹¹⁾

会衆の歌声は静謐な山の空気に鳴り響く。the Catskills の山々がそのまま自然の大聖堂なのである。the Mountain House はまさに“a sanctuary on the Lord's day”であった。

— 5 —

以上のように、the Catskill Mountain House は聖なる礼拝の場であったが、実はそれだけではなかった。Sears の言う “an idealized home” (67) という別の側面をも持っていたのである。Martineau は、嵐の日、5 時間以上も馬車に揺られて夜の 8 時半にやっと the Mountain House に到着して、「明かりとお茶が嬉しかった」(84) と述

べている。ホテルになど泊まるより the wilderness の中でビバークする方を好んだ Sands のような初期の巡礼は別として、多くの人は the Mountain House の提供する safety と comfort を有り難く感じたのであろう。

Richards は 1854 年に *Harper's New Monthly Magazine* に掲載した記事の中で、the Mountain House は“all the conveniences and elegances of our most recherche metropolitan hotels” (146) を提供していると紹介している。これより前、すでに 1843 年に当時きっての dandy であった Nathaniel Parker Willis が “a luxurious hotel” と呼び、ここでは Hermitages の白だろうが赤だろうが Burgundies だろうが、はたまた French dishes でも French dances でも好きなように選べるのだといささかあきれ顔で述べている。

How the proprietor can have dragged up, and keeps dragging up, *so many superfluities* from the river level to that eagle's nest, excites your wonder. It is the more strange, because in climbing a mountain the feeling is natural that you leave *such enervating indulgences* below. The mountain-top is too near heaven. It should be a monastery to lodge in so high—a St. Gothard, or a Vallombrosa. But here you may choose between Hermitages, “white” or “red,” Burgundies, Madeiras, French dishes and French dances, as if you had descended upon Capua. (Willis, 106)

何もワインと料理だけではなかった。早くから各部屋にはぜいたくな家具がしつらえられ、立派な絨毯が敷かれ、“coaches of ease and elegance afford a grateful rest to the weary traveler” (qtd. in Van Zandt, 39) であったことが当時の記録から分かる。家を遠く離れている旅行者の目には、the Mountain House は“an idealized home”と写ったことであろう。

矛盾するようだが、実は、“sacred places”とい

うものは、昔から“the religious and the secular”の両面を併せ持っていたと Sears は指摘している。中世の“the great pilgrim churches”の周りにはいつもたくさんの“fairs and markets”が出来たのである (Sears, 9)。考えてみれば、人間が人間である限り、人の大勢集まる場には必ず聖もあれば俗もあるので、聖なる礼拝の場 the Mountain House が同時に多少の贅沢を楽しむ場でもあったとしても驚くにはあたらないであろう。

以下の Richards の記述には非常に印象的なものがある。the Mountain House に滞在中、近くにある滝まで散策に出かけて疲れた Richards は、帰路、the wilderness の中にぽつんと立つ the Mountain House の姿を認めてほっとするのである。その姿は実に暖かく美しく感じられた。

It was a lonely walk, and despite our romance, we were not a little relieved when we emerged from the wilderness upon the larger path which leads over the plain of the “Pine Orchard” to the Mountain House. *The sight of that beautiful structure, in its wild insulation, and with its many illuminated windows*, obscured only by the passings and repassings of gentle forms, was as grateful to our eye as was the sound of the distant music to our ear.

(Richards, 149)

ここには、the Mountain House が象徴する文明と安楽対それを取り巻く wilderness というドラマティックなコントラストが感じられる。the Mountain House は the wilderness の中での礼拝を可能にしてくれる文明のスポットともいえたのである。

だが、時代の流れとともに、the Mountain House は“a house of entertainment” (Durand, 10) という俗的性格を強めていく。すでに、19 世紀半ばから見られた現象であったが、Sabbath はともかく、週日は若い客たちが真夜中にどんちゃん騒ぎのパーティを行い、“Night after night the

windows of the palatial hotel were ablaze with light and festivity, the sounds of revelry penetrating the accustomed quiet of the Catskills' deep repose" (Van Zandt, 63) となっていたのである。

1825 年頃から南北戦争に至るまでの時代は, tourist travel が genteel elite によって支配された時代であった。この時代の旅行者は主として裕福な層の人々であり, 旅の経験を通じて自らを高めようと考えていた。南北戦争後, 都市化と工業化の時代となり, 都市の人口が増え鉄道の運賃も安くなって, 今まで旅行などしなかった多くの人が旅行に出かけるようになった。しかし, このように旅が大衆化するにつれて, 19 世紀前半のロマンティックな宗教的情熱はすたれていったのである。Sears は 1885 年までには tourism は "more of a mass phenomenon and more commercial" になったとしている (Sears, 10)。その結果, the Catskill Mountain House などアメリカの tourist attractions はかつての宗教的意味合いを失ってしまったのであった。これは, アメリカで開拓が進み, 神の啓示の場所であった the wilderness が後退していったのと時期的に一致している。アメリカの土地がすべて誰かの所有に帰しフロンティアが消失したのは(自由土地の消失)は 1890 年のことであった。フロンティアの消失はまた 19 世紀アメリカのロマンティックな夢の消失でもあったのである。

注

- 1) Van Zandt, Roland. *The Catskill Mountain House*, p 3 による。以下, 特に断りのない Van Zandt からの引用はすべてこの著作からのものとする。
- 2) イタリア体体の使用は筆者による。以下, 引用文中の特に断りのないイタリア体体の使用はすべて筆者によるものとする。
- 3) 原資料は, Wigglesworth, Michael "God's Controversy with New England", Massachusetts Historical Society, *Proceedings* 12 (1872-1873). 83-84.
- 4) 原資料は, Hennepin, Louis. *A New Discovery of a Vast Country in America*. London, 1698. 29-30.
- 5) 原資料は, Harris, Reverend Thaddeau Mason *The*

Journal of a Tour into the Territory Northwest of the Alleghany Mountains Boston. Manning and Loring, 1805. p 60.

- 6) 原資料は, *Home Authors and Home Artists; or, American Scenery, Art, and Literature*. New York. Leavitt and Allen, 1852. p.40
- 7) 原資料は, Hale, Edward Everett "The Early Art of Thomas Cole." *Art in America*, Vol.4, 1916. p.40.
- 8) 原資料は, McGreevy, Patrick. "Niagara as Jerusalem," *Landscape*, 28, no. 2, 1985. 27-32.
- 9) 原資料は, Elhade, Mircea. *The Sacred and the Profane*. New York: Harcourt, Brace, 1959. p.44.
- 10) 原資料は, Dwight, Henry Edwin. "Account of the Kaatskill Mountains," *The American Journal of Science and Arts* 2 (November 1820) 11-12.
- 11) 原資料は, Rockwell, Rev Charles *The Catskill Mountains and the Region Around*. New York: Taintor, 1867. Rev. ed 1873 259-262.

引用文献

- Brooks, James "Our Own Country", *The Knickerbocker*, 1835.
- Bryant, William Cullen. *Oration and Addresses*. New York: Putnam, 1873.
- Clark, Willis Gaylord. "Ollapodiana. Number Twenty," *The Knickerbocker* 10, August 1837.
- Cooper, James Fenimore *The Pioneers* (Mohawk Edition). New York Putnam.
- Durand, Asher B, and E. Wade, eds *The American Landscape*, No. 1. New York: Bliss, 1830. (With a preface by William Cullen Bryant)
- Jefferson, Thomas *The Complete Jefferson*, ed Padover, Saul K. New York: Duell, Sloan & Pearce, 1943.
- Martineau, Harriet. *Retrospect of Western Travel*. London Saunders and Otley, 1838
- McCoubrey, John W. *American Art 1700-1960*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, INC, 1965.
- Moore, Richard S. *That Cunning Alphabet: Melville's Aesthetics of Nature* Amsterdam: Rodopi B V, 1982.
- Myers, Kenneth *The Catskills: Painters, Writers, and Tourists in the Mountains 1820-1895*. Yonkers, New York The Hudson River Museum of Westchester, 1987.
- Nicolson, Marjorie Hope *Mountain Gloom and Mountain Glory: the Development of the Aesthetics of*

- the Infinite*. Ithaca, New York: Cornell University Press, 1959.
- Richards, T. Addison. "The Catskills", *Harper's New Monthly Magazine*, Vol. IX, No L, July, 1854.
- Sands, Robert. "Association", *The Talisman*, MDCCCXXX, 1829.
- Sears, John F. *Sacred Places: American Tourist Attractions in the Nineteenth Century*. (the paperback edition) Amherst: University of Massachusetts Press, 1998.
- Van Zandt, Roland. *The Catskill Mountain House*. Hensonville, NY: Black Dome Press Corp., 1991.
- Van Zandt, Roland. *Chronicles of the Hudson*. New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1971.
- Wills, Nathaniel Parker. *American Scenery*. (Drawing by W.H.Bartlett.) vol. I. London: Virtue, 1840.